

TS (性転換) すると、どうしてみんな **Bitch** になっちゃうんだろね？



(C)コドモは読んじゃダメ! 2012

魔法少女ヤマト



110ページ

43ページ



地下鉄でのお仕事

くのいちの眼帯



3ページ







「何だ、これ？」

床の間らしき部屋の床で、佐東聡史（さとうさとし）は足元に何か落ちていている事に気付いた。自分の家ではない、母方の実家にある、和室である。

明日から、聡史が通い始める進学先の大学は、家からは遠いが、母方の実家の近くにある。尚且つ、実家は屋敷といえる程に広い為、聡史は母方の実家である志賀（しが）家の屋敷に、下宿する事になったのだ。

広過ぎるが故、志賀家の屋敷内で迷ってしまった聡史は、この床の間らしい和室に迷い込んだ直後、足元に落ちていた妙な物に気付いたのである。

「眼帯……だよな、これ？」

聡史は好奇心から、その妙な物を摘み上げ、観察してみる。言葉通り、それは眼帯であった。ただ、妙なものは眼帯の形状だ。



普通、眼帯といえは目を覆う部分が円形だったり、四角だったりするものなのだが、聡史が拾ったのは、ハート型だった。

「コスプレ用の奴かな？ それにしても、何でこんな所に落ちてるんだらう？」

そう呟きながら、聡史は左目用らしき眼帯を装着してみる。眼帯を着けた事など無いので、単なる好奇心から。

すると、驚くべき事が起こった。突如、眩いばかりの光に部屋中が包まれたのだ。閃光弾でも炸裂したかの様な光は、数秒間で収まり、部屋はすぐ元の状態に戻った。

だが、部屋は元に戻ったのだが、元通りになっていないものもあった。それは、聡史の身体である。

「ん？ 何か……身体が変な感じだな」

自分の身体……特に胸や股間に妙な違和感を覚えた聡史は、目線を落として胸の状態を確認する。見覚えの無い二



つの膨らみがある、自分の胸を。

「え？ 俺……太った？」

柔らかな肉が盛り上がっている、女性や太った男性の様な胸の状態を確認し、聡史は自問する。だが、身体の各所を触ってみるが、微妙に柔らかさを増した気はすれども、太った感じはしない。

そして、触った身体の各所の中に、股間があった。股間には、男性なら存在する筈の物が無い事に、聡史は気付く。胸と股間の状態から導き出せる答えは、ただ一つ。だが、それは有り得ない筈の答えだった。

「俺の身体が女になってるとか……。まさか、そりや流石に有り得ないよな、それは」

「いや、有り得るんだよ、そのままさが」

独り言のつもりだった聡史の呟きに、意外にも反応がある。聡史には聞き覚えがある、青年の声で。



「雅史（まさし）！」

答えを返した者がいる、廊下に面した戸の方に目をやり、聡史はカジュアルな服装に身を包んだ、声の主の名を呼ぶ。声の主は志賀雅史、聡史の一つ年上の従兄である。

志賀家の屋敷の住民であり、今後は同じ大学に通う先輩ともなる雅史が、部屋に足を踏み入れつつ、聡史に声をかけて来たのだ。驚きと困惑が半々といった感じの表情を、浮かべながら。

「蔵の掃除をしてる間、蔵の中にあつた色々な物を、日干しにしておいたんだが、それをミケの奴が啜えて、どっかに持って行ったんで、探してたんだけど……」

それ……と言いながら雅史が指差したのは、聡史が装着している、ハート型の眼帯。

「まさか、聡史が着けちまうとは……参ったな」

ちなみに、ミケとは志賀家の飼い猫である、雌の三毛猫だ。

「な、何なんだよ、この眼帯？」

「妙な古物を集めるのが趣味だった爺さんが集めた、コレクシヨンの一つだよ。男が着けると、身体と服装が女忍者みたいになってしまう呪いがかかっている事から、くのいちの眼帯って呼ばれてるらしい」

雅史は、くのいち……女忍者風の外見になっている聡史の外見を観察しつつ、話を続ける。

「それにしても、見事なまでに女忍者風になったな、結構可愛いじゃん。まあ、聡史……元から叔母さん似で、割と女顔だったし、運が良いじゃないか」

「いきなり身体が女になって、運が良い訳無いだろ！」

聡史は眼帯を外そうとするが、まるで強力な接着剤で固定されているかの様に、眼帯は外れない。

「無駄だよ、それは男に戻らないと、外せないんだ」



「だったら、どーすりや男に戻れるんだ？」

当然と言える聡史の問いに、雅史は多少、哀れむ様な感じを込めた口調で、答える。

「男と性的な関係を持つ……ま、簡単に言えばセックスして、身体の中に男の精……つまり精液を受け入れると、その眼帯は外せるようになるから、男に戻れるんだって」

「お、男と……セックス？」

思わず大声を上げ、聞き返す聡史に、雅史は頷く。

「そうすれば、すぐに眼帯外せるから、明日の朝までに男とセックスすれば、入学式前までに男に戻れるよ」

「じよ、冗談じゃない！ 男とセックスなんて、出来る訳が無いだろ！」

「……とはいっても、しないと男に戻れないぜ。他に男に戻れる方法は、一切無いからな。それでもいいのか？」

「いや、良い訳無いだろうが！ もうすぐ大学も始まるつてのに！」

「だったら、選択肢は他に無いんじゃないか？」

雅史の言葉に、聡史は言い返せない。確かに、男に戻る方法が一つしかないなら、他に選択肢は無いのだ。

「でも、聡史は運が良い方だぜ。さっきも言ったけど」

「だーかーらー、運が良い訳無いだろ！ いきなり女の身体になって、男とセックスしないと男に戻れないとかいうアホみたいな状況になってるのに！」

「まあ、それはそうか。言い方が悪かったな。不幸中の幸い……程度の運の良さだ」

「今の俺のどこに、不幸中の幸い程度の運の良さが、あるんだよ？」

苛ついているが故の荒い口調で、聡史は雅史を問い詰める。

「見た目が、結構可愛くなってるのが、運が良いんだ。そ

の外見なら、抱いてくれる相手の男探すのに、苦勞しないだろうからな」

「俺が……可愛いから、相手の男探すのに苦勞しない？」  
聞き返す聡史に、雅史は頷く。

「男に抱かれて男に戻ろうにも、抱いてくれる男がいないと、話にならないからな。見た目がそれなりじゃないと、相手探すの大変なんだよ」

「成る程……って、詳しいな、雅史」

「まあ、爺さんから色々話を聞いているから。康史（やすし）さんが、聡史みたいに知らずにコレを着けて、女の身体になった時は、相手が中々見付からず、二ヶ月くらい女の身体のまま、暮らす羽目になったそうだけ」

「康史さんが、これ着けて女に？」

聡史は驚きの声を上げる。康史は筋肉質かつ大柄で、物凄い男らしい、聡史達にとっての叔父なのだ。

筋骨隆々とした、ごつい顔の康史が女性化した姿を想像し、聡史は思わず噴出しそうになるのを、何とか堪える。

「まあ、何とか出会い系で、物凄くマニアックな趣味の男を見つけられたんで、男に戻れたんだとさ」

「……それは、良かったな」

「康史さんは極端な例としても、この眼帯で女性化した場合、相手探しに困らないくらい、見た目が可愛かったり綺麗になったりする奴は、一部の女顔の奴くらいなんだ。だから、そういう意味で言えば……結構可愛い感じに女性化した聡史は、運が良いって訳」

「成る程」

雅史が言う所の運が良いというのが、何を意味するのか理解した聡史は、自分を女顔に親に感謝する。

「そういう訳だから、友達でも何でもいいから、適当に相手になってくれる男探して、さっさと男に戻れ。爺さんの

話だと、その眼帯を着けている限り、妊娠や性病の心配は無いそうだから、そういう意味では安心しとけ」

気楽な口調で、雅史は続ける。

「明日の入学式までに男とセックスして、男の身体に戻らないと、女のまま入学式に出る事になっちまうからな」

「適当に相手になってくれる男探せて言われても、そんな……無理だよ！ こっちには、まだ親しい男の友達いなんだし」

地元には、相当な無理をきいてもらえる程度に親しい男の友人が、聡史にはいる。だが、今から地元に戻れば、明日の入学式当日に、こちらに戻って来るのは、事実上不可能に近い程度に、聡史の下宿先であるこの家と地元は、離れているのだ。

「だったら、出会い系とか使って、行きずりの相手でも探せばいいじゃないか」

「そんな……行きずりの知らない男相手なんて、怖いから嫌だ！ 変な奴相手する事になったら、危ない目に遭うかもしれないじゃないか！」

「そんな事言われたって、相手してくれる男をどうにかしないと、男に戻れないんだから、我慢しろって」

そう言い放つと、雅史は聡史に背を向け、和室を出ようとする。

「ちよ……待てよ！ 逃げるな！」

聡史は雅史の手を掴み、引き止める。

「な、何だよ？ 俺は爺さんに頼まれた、蔵の掃除の続きをやらなないと……」

「ふざけんなよ！ だいたい、お前がくのいちの眼帯を、ちゃんと管理しないでミケに持ってかれたのも、こうなった原因の一つだろうが！ 責任取って協力しろ！」

食って掛かる聡史の主張には、説得力がある。実際、聡



史がこんな目に遭う責任の一端は、確かに雅史の管理不行き届きにあるのだから。

「まあ、確かに俺にも一応責任はあるから、協力するのが当然なんだろうけど、協力って言っても、何すりゃいいんだよ？」

「それは……その……」

具体的に、どんな事を協力させるかまで、まだ考えてはいなかった聡史は、考え込む。

「ちゃんとしていて危険性が無く、かつ後腐れの無いセックスが出来る男を、俺の友達の中から選んで、誰か紹介してやろうか？」

悩む聡史に、雅史は話を続ける。

「俺……男子校出身だから男友達多いんで、多分……聡史が望む条件に合う奴、いると思うぞ」

(ん？ 男子校出身？)

雅史の話を聞いて、聡史は気付く。目の前にいる雅史自身が男であり、尚且つ良く知っている上、危険性の無い相手である事に。

「そっか……考えてみれば、雅史が俺の相手すればいいだけの話じゃん！」

「え？」

突如、男に戻る為のセックスの相手として、聡史が自分を指名した事に、雅史は驚き、間の抜けた声を漏らしてしまふ。

「雅史なら、特に危険性は無いし、良く知ってる男だから、雅史が俺の相手するのが、一番いいよ。少なくとも、知らない男と行きずりでするより、相当いい！」

「いや、でも……それは駄目だよ」

狼狽する雅史を、聡史は問い詰める。

「何でだよ？ 協力するのが当然だって言ってたじゃん！」

あれ嘘かよ？」

「確かに、そうは言ったけど……俺は聡史が男だって知ってるから、セックスするのは流石に無理だと……」

「何で？」

「そりゃ、幾ら外見が可愛い女の子になってるからって、中身が男だと分かってる相手に……勃たないと思うんだよ。勃たないと……セックスは出来ないだろ」

「……そんな、勃つかどうかなんて、試してみないと分からないじゃん」

「試してみないとって？」

聞き返された聡史は、恥ずかしいのだろう、頬を少しだけ染ながら、返事をする。

「それはその……セックスする手前の奴だよ。手とか口とか使ったりして、勃たせてからするじゃん、普通の男と女がする時でも」

「要するに、前戯みたいな事して、俺のが勃ったら……出来るって訳か。まあ、確かに……勃てば出来る事は出来るだろうけど」

「だったら、とりあえず試してみるって事で、決まりね」

聡史の言葉に、雅史は頷く。自分にも責任があり、尚且つ協力すると言った手前、断り難かった雅史は、気が進まないものの、聡史の要求を飲まざるを得ない。

「じゃあ、さっさと服脱げ！」

年下ではあるが、基本的に強気の聡史に命じられ、雅史は渋々と服を脱ぎ始める。

「妙に積極的だな、聡史。ひよつとしたら、そっちの趣味とかあったりして、男相手に……したかったりするんじゃないの？」

紺色のフリースを脱ぎ捨て、クリーム色のジーンズのボタンに手をかけつつ、雅史は疑惑の目を聡史に向ける。



「有る訳無いだろ！ やらないと男に戻れないから、嫌々やっつてんだよ！」

語気を強めて否定しつつ、聡史は雅史の前に立つ。既に、雅史は裸になり、引き締まった細身の身体を、聡史の目線に晒している。

視線を下げると、股間にぶら下がっている、自分の物と左程サイズが変わらないペニスが、聡史の視界に入る。

(これを……勃てないといけないのか)

聡史は心の中で、嘆息する。性的には極めてノーマルである聡史にとって、男とセックスする事は当然、前戯に相当する行為……他の男のペニスに触れる事だけでも、かなり気色が悪い、可能な限り避けたい行為である。

だが、今回は……それを行うしか無いのだ。そうでなければ、男に戻れないし、雅史のを勃たせられなければ、雅史以外の見知らぬ相手に、そういった行為をしなければな



らない。

どうせ一度は、男相手にセックスをしなければ駄目なら、見知らぬ男相手にするよりは、見知った信頼出来る相手である雅史を相手にする方がマシだろう……。そう考えながら、聡史は雅史の股間に手を伸ばす、湧き上がる嫌悪感を、必死で堪えながら。

掌に収まるサイズのペニスを、聡史は軽く揉んでみる。柔らかい感触が、伝わって来る。

(自分でする時みたいに、すればいいんだよな)

雅史の前に跪き、マイクを握る時の様に、右手でペニスを軽く握る。自分でする場合とは、手の向きが異なるので、微妙にやり難さを感じながらも、手を前後に動かし、ペニスを刺激してみる。

そのまま数分、聡史は手による愛撫を続ける。手を前後に動かす合間、自慰の際自分相手にする様に、軽くペニス



や陰囊の裏を指先で撫でたりしながら。

そういった愛撫の効果が、一応はあったのだろう。雅史のペニスは次第に膨らみ、硬さを増す。皮が剥けて露出している、赤みを帯びた先端から、透明な粘液が滲み出て、聡史の手を濡らす。

その粘液の感触や生臭い臭いが、不快ではないといえは嘘になるが、粘液の分泌自体は愛撫に効果がある証拠でもあるので、聡史は嬉しさも感じていた。

（でも、これじゃ全然、硬さも大きさも足りないんじゃないかないか？）

勃ちつつはあるが、セックスを行うには十分とは言えない大きさと硬さの状態のままである、雅史のペニスを睨みながら、聡史は雅史に問う。

「ひよっとしたら、雅史のって……大きくなってる時でも、こんなもんなの？」

「そんな訳無いだろ！ まだ半勃ちくらいだって！」

自分の男としての物の大きさを、見くびられたのが勘に触ったのだろう、雅史は少しだけ気色ばみ、強い口調で言い返した。

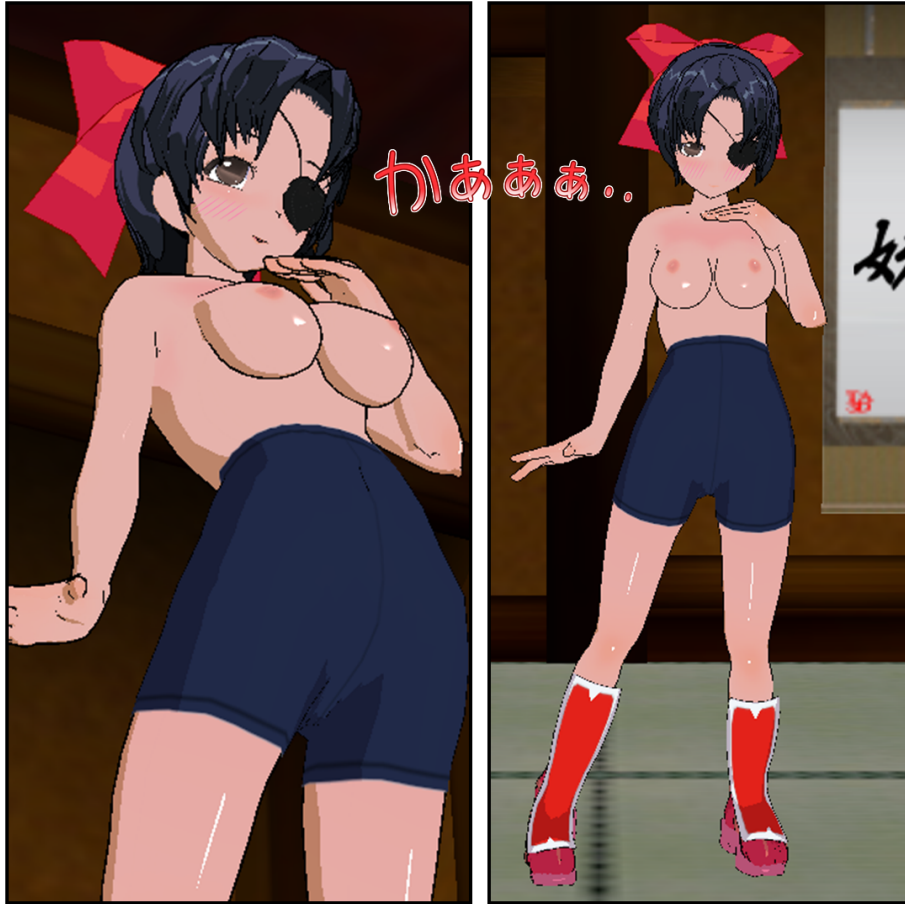
「……にしては、中々これ以上の大きさにならないな」

「だから、やっぱ無理だったんだって。諦めて……他の相手探そうぜ」

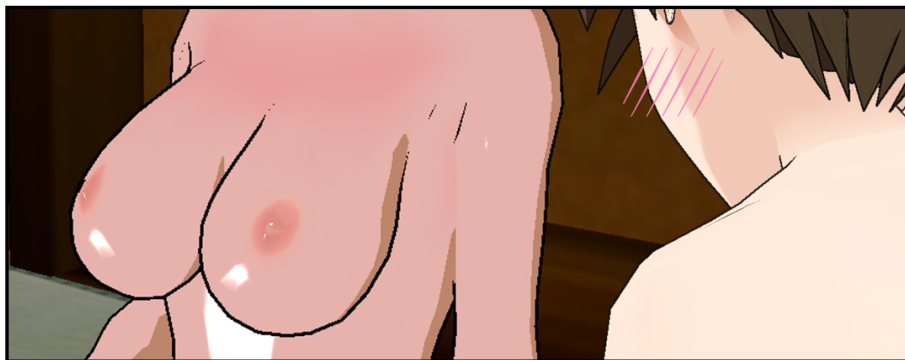
「まだ、手ですただけなのに、諦めるとか無しだろ！ 前戯には、他にも口でやったり胸でやったりするのも、あるんだからな！」

「そりやまあ、他の方法もあるんだらうけど、聡史は俺のを……出来るの、口や胸で？」

雅史に問われ、聡史は流石に、狼狽する。自分以外の男のペニスを、手で触るだけでも相当嫌なものなのに、口で啣えたり、胸で挟んで奉仕したりする事の嫌さが桁違いな



わあああ..



のは、明らかだからだ。

（でも、今は…：嫌がってる場合じゃないんだ！ そうしない、男に戻れないんだから！）

心の中で自分に言い聞かせて、改めて決意を固めてから、聡史は考える。手で駄目なら、次は口でするか胸でするか。半勃ちした、先端が濡れているペニスを見つつ、聡史は胸でする方を選ぶ。理由は、男のペニスを口にするより、胸で愛撫する方が、多少なりと嫌悪感が軽いと思えたからだ。

（着たままだと、胸ではやり難いか…：）

聡史は、赤い忍者風の装束を脱ぎ捨て、上半身裸になる。柔らかさそうで豊かな乳房が露になり、聡史の動きに合わせて揺れる。

「お…：…」

雅史が聡史の乳房を目にして、驚いたような声を漏らす。

目を見開き、頬が微かに染まっている。

「な、何でいきなり脱ぐんだよ？」

露出した聡史の胸に反応してしまった事を誤魔化すかのよう、雅史は語気を強め、聡史に問う。

「そりゃ、胸ですするなら、服着てたらやり難いからに、決まってるじゃん」

至極妥当な聡史の返答に、雅史は納得したかの様に黙る。「じゃあ、胸ですするから……膝立ちになってよ。その方が、高さ合わせ易いんだ」

聡史の言葉に、雅史は豊かな乳房を見下ろしながら頷き、膝立ちになる。中身が男だとはいえ、見た目は完全に魅力的な女と化している聡史の胸に、雅史の目線は吸い寄せられてしまうのだ。

畳の上にぺたんと座り込み、聡史は胸の位置を雅史の股間に合わせる。

(AVとかだと、確かこんな感じだったよな)

男子校に通っていたせいもあり、女に余り縁が無い高校生活を送っていた為、された経験自体は無いのだが、やり方自体は友人から借りたAVなどで、見知っている。聡は見よう見真似で、胸による愛撫……いわゆるパイズリを始める。

両手で自分の乳房を掴んで動かし、半勃起状態のペニスを挟む。割とボリュームがある乳房は、愛撫を行うに程良いサイズだ。

ペニスを挟んだ乳房を、上下に揺らしたり、左右から挟み込むように押し下したりして、聡史は雅史のペニスを刺激する。慣れぬが故に拙くはあるのだが、勃起させなければという意志のこもった行為は、相応の効果をもたらす。

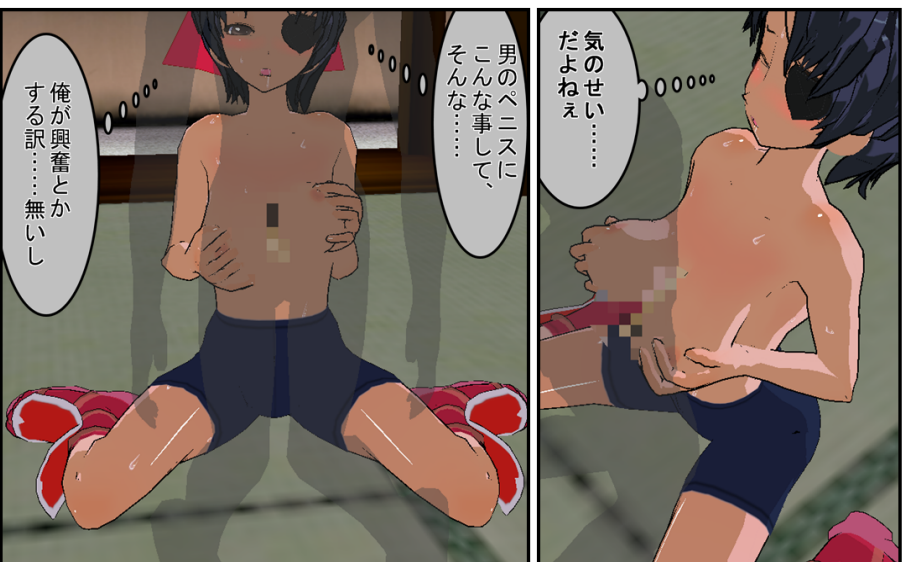
ペニスが、次第に硬さを増し始めたのだ。乳房の中で膨らみ、熱を持ち始めている。勃起したといえるレベルを十





男のペニスにパイズリしながら、喜ぶってのは……男としてどうかとは思っけど……

まあ……今は仕方が無いよな



気のせい……だよなえ

男のペニスにこんな事して、そんな……

俺が興奮とかする訳……無いし

とするなら、既に八程には達しているだろう。

(ここまで来れば、もう少しだ！)

気色悪さを我慢しながらの、胸による愛撫が功を奏し始めた事を自覚し、聡史は喜ぶ。

(男のペニスにパイズリしながら、喜ぶってのは……男としてどうかとは思っけど、まあ……今は仕方が無いよな) そんな自分に対する言い訳を、聡史は心の中で呟く。言い訳染みた事を考えてしまうのは、胸での愛撫を続けている間に起き始めた、変化のせいでもある。

慣れとは別の意味で、嫌悪感が薄らぎ始めているのを、聡史は心のどこかで自覚しているのだ。自身の身体の奥底で、熱く……燻り始めた存在のせいである事を、聡史は本能的に察してしまっている。

その熱は、聡史の肌を汗で濡らし、頬を染めさせる。息も愛撫による運動量以上に、荒れ始めている。





体験版はここまで！



続きは本編で



お楽しみ下さい！

TS (性転換) すると、どうしてみんな *bitch* になっちゃうんだろうね？ 体験版